

太陽 ASG

エグゼクティブ・ニュース

テーマ：私の体験した日韓関係

執筆者：前駐韓国大使 武藤 正敏氏

要旨（以下の要旨は1分30秒でお読みいただけます。）

約10年前の日韓ワールドカップサッカー後に、韓流ブームが沸き起こったのは記憶に新しい所です。最近では竹島問題や政治家の発言を契機とする慰安婦問題の再燃などから、日韓関係は冷え込んできたように窺われます。今回は日韓関係について、昨年まで韓国大使を務められた武藤正敏氏に、数次の駐在経験を基に解説していただきます。

先ず、最初に赴任した1975年には、韓国人が「日本について率直に語ると、親日家として排斥される」雰囲気がありました。その後、外務省・北東アジア課勤務の1982年に日本の教科書問題（アジア「侵略」を「進出」と表現）が起きたときには、韓国の主要紙は1ヶ月に亘り、日本の「蛮行」を非難し、日本人はレストランにも行けない雰囲気になりました。しかし、2度目の韓国勤務時にはソウルオリンピックが開催され（1988年）、日韓両国の相互理解が始まりました。テレビ討論で日本を訪問した若い女性が「親からの話とは違い、日本はきれいで親切だった」との発言があるや、討論の雰囲気が一変するのを見て、お互いを知ることで日韓関係は変わると実感しました。

日韓関係にはその後も紆余曲折がありました。北東アジア課長時代の1991年には、慰安婦問題が発生しました。当時の宮澤総理の韓国訪問に先立って、盧泰愚（ノ・テウ）大統領から、「浴衣がけで着て欲しい」との伝言がありましたが、いざ訪問して見ると、会談で慰安婦問題が正面から取り上げられ、貿易問題では無理難題を押し付けられ、その結果、日本で嫌韓感情が芽生えました。ただ、貿易問題が決着すると慰安婦問題でも協議できる雰囲気になり、1つが解決すると他の問題にも光明が射してきました。1998年には金大中（キム・デジュン）大統領の日本国賓訪問があり、「パートナーシップ宣言」が発表されました。韓国は日本の文化受入と同時に日本を平和民主主義国家として認めました。お互いに事実を認め合うことが、日韓関係の出発点だと思います。ただ、盧武鉉（ノ・ムヒョン）大統領の時代には、歴史の見直しや、竹島問題を歴史問題としたことにより、再び緊張が高まりました。

2010年8月は、日本の韓国併合100年に当たる月に韓国に赴任しました。李明博（イ・ミョンバク）大統領は、「日本との課題はまだあるが、ともに新たな未来を開拓する」と演説し、日韓関係の将来は明るいように思われました。2011年の東日本大震災では韓国から、自国での如何なる自然災害にも増して、支援と連帯の輪が広がりました。

現在、歴史認識を巡って竹島問題や慰安婦問題がありますが、日韓間の貿易、投資関係は緊密化しています。両国では、政治問題、歴史問題を除けば国民感情の対立はなく、関係が悪くなる時も速ければ良くなる時も速い特徴があります。日韓関係については一喜一憂せず、中長期的な視点、流れで捉えていくことが大切だ、と考えます。

「太陽 ASG エグゼクティブ・ニュース」バックナンバーはこちらから⇒<http://www.gtjapan.com/library/newsletter/>
本ニュースレターに関するご意見・ご要望をお待ちしております。Tel: 03-5770-8916 e-mail: t-asgMC@gtjapan.com
太陽 ASG グループ マーケティングコミュニケーションズ 担当 藤澤清江

テーマ：私の体験した日韓関係

前駐韓国大使 武藤 正敏

1. はじめに

私は1972年に外務省入省以来、5度にわたる在韓国大使館勤務を経て、昨年（2012年）11月に大使として退官いたしました。このニュースでは、大使として勤務する際に、私の考えのベースとなった体験をお話いたします。

2. 私の日韓関係（概要）

私は、外務省入省以来、約40年間韓国と付き合い合ってきました。それは韓国発展の歴史、日韓関係発展の歴史だったと思います。皆さんは、日韓関係“発展”の歴史には同意されないかもしれませんが。現在の日韓関係は近年最悪、との声を良く聞きます。私は、これまで何度も日韓関係の浮き沈みを見て参りました。その体験から、日々の現象に一喜一憂せず、中長期的な視点、流れの中で見ていくことが重要、と感じるようになりました。

このニュースの中で、そうした歴史の流れを感じていただければ幸甚です。

3. 最初の赴任

私は、本省勤務、米国留学を経て、1975年に初めてソウルの土を踏みました。最初の任務は韓国語研修であり、延世大学校韓国語学堂に席をおきました。在学中でもっとも印象深かったことは、日本を訪問した学友が、「日本について率直に語ると、親日家として排斥される」と述べていたことです。3・1独立運動の日（注）や終戦記念日には、終日日本の蛮行が放映されていた頃です。大使館勤務となって、経済協力を担当しましたが、日本の協力については一切報道されませんでした。

しかし、韓国は着実に発展していました。当時の須之部・韓国大使は地方を訪問し、「地方の若手行政官には本省の局長にしてもいいくらいの見識を持った者がいる。韓国はいい国になるよ」と言っておられました。当時は、セマウル（新しい村作り）運動が始まっていました。若手行政官は経済企画院など中央から派遣され、各村の開発計画作り、実施の指導をしていました。有能な指導者が地方にいたことが韓国発展の原動力になりました。また、セマウル運動を通じ、国民に競争意識を植え付けたことは、良きに付け悪しきに付け、その後の韓国を大きく変えていきました。ちなみに、朴正熙（パク・チョンヒ）大統領は明治維新の仕組みを韓国にうまく適応し、韓国発展の基礎を築きました。

（注）3・1独立運動の日：1919年（大正8年）3月1日に日本統治時代の朝鮮半島で起こった独立運動。

4. 教科書問題

1982年から83年にかけて、本省で朝鮮半島担当の北東アジア課に勤務しました。課に配属となったときには、韓国から、韓国の苦難は日本の朝鮮支配、およびこれに続く南北分断、北朝鮮からの防衛にあるとして、総額60億ドルの経済協力要求があり、日韓

関係は緊張していました。82年夏にはさらに、日本の教科書で、アジア「侵略」を「進出」としたなどとして、韓国、中国双方から歴史歪曲を非難される事態となりました。当時、韓国の主要紙は8面編成でしたが、そのうち1面、3面、4面全て日本の蛮行を批判する記事で約1ヶ月に亘り、埋め尽くされました。韓国にいる日本人はタクシーに乗れず、レストランにも入れない状況で、大使館には連日激しいデモが続きました。

こうした事態を沈静化したのが、中曽根総理（当時）の訪韓であり、これによって経済協力問題で決着したことでした。中曽根総理は就任後直ちに全斗煥（チョン・ドゥファン）大統領に電話し、総理就任後初めての外国訪問は韓国としました。こうした誠意が通じたのでしょう。教科書問題についても、その後官房長官談話を発出し、政府の責任において是正することとしました。すると韓国政府はこれを受け入れ、両国の雰囲気も沈静化していきました。総理の訪問に先立っては、日韓議員連盟（韓国との友好関係を目的とする日本の超党派議員連盟）幹部や総理特使が韓国を訪問し、調整に当たりました。日韓間にはしばしば複数の困難な問題が同時に発生することがありますが、その時に、どれか1つでも光明が射すと、他の問題についても解決の機運が芽生えるのだと感じました。この経験は私が北東アジア課長時代に生きました。

5. ソウルオリンピック

2度目のソウル勤務では文化広報を担当しましたが、同時にオリンピックアタッシュとしてソウルオリンピック（1988年開催）に参加する日本選手団の受け入れ準備にもあたりました。印象的だったことは、この時期に日韓両国民の相互理解が始まったと思います。オリンピックと前後して、両国民の交流が飛躍的に盛んになり、お互いを知るようになったことがきっかけです。

その頃、韓国で旅券発給が自由化されました。それまでは、情報筋の審査を通る必要がありました。自由化を記念して、朝鮮日報が、「日本に残る韓国文化を訪ねて」とする700～800名の旅行団を派遣しました。帰国後テレビで討論会があり、最初は年配の人々が「日本が嫌な国だった」とのニュアンスの発言をしていました。時間がたち、女子大生風の人が、「日本にある韓国文化を見に行っただが、印象的だったことはそれではなく、日本がきれいで、日本人は親切で、親から聞いていた日本とはずいぶん違った」と述べたときでした。突然討論会の雰囲気が変わり、日本に関する率直な感想を述べ合う場となりました。討論会の参加者が同じものを見ていたからですが、一人が勇気を持って声を出すと多くの人が呼応するのを見て、これから日韓関係は変わっていくだろうと思いました。また、日本でもオリンピックの韓国を見るため多くの人々が訪れ、また、テレビの生中継で韓国を見て、韓国に対する評価が大きく変わりました。

6. 課長時代

韓国から帰国して2年余りが経ち、朝鮮半島担当の北東アジア課長を拝命しましたが、直後に起きたのが従軍慰安婦問題です。1991年に金学順さんが元慰安婦であると名乗り出て、日本の国会で取り上げられました。翌92年1月に宮沢総理（当時）が韓国を訪問した際には、慰安婦問題と貿易不均衡問題で緊張した会談になりました。総理の訪問前には盧泰愚（ノ・テウ）大統領の特使として、元外務部長官で駐日大使の李源京氏が訪日し、「浴衣かけで来て欲しい」との伝言がありました。しかし、宮澤総理が訪韓してみると結局は無理難題を押し付けられることになりました。日本で嫌韓感情が芽生えたのはこの時でした。特に、それまで日韓関係の増進に努力してきた人に、そうした

傾向が顕著でした。この時以来、日韓関係でお互いに反目するようになったのは不幸なことでした。

慰安婦問題については、問題発生以来全力を挙げて調査を行い、過去の資料ばかりでなく、元慰安婦からの聞き取りも行って、河野洋平官房長官談話を発表しました。この時、私は在韓国大使館政治部長として、聞き取り調査の実現に尽力しました。元慰安婦の方々に対し、日本政府および日本国民の気持ちを如何に表すか、国民的議論を経て、「アジア女性基金」を設立しました。韓国政府は当初これに好意的でしたが、日本政府が国民の募金を行ったのは政府の責任を逃れるためだとして、元慰安婦支援団体が拒否したため、受け入れられることはありませんでした。元慰安婦の方々の中にもいろいろな考えがあったと思いますし、この時より多くの方々に日本の気持ちを示すことが出来なかったのは残念です。

私の課長時代、朝鮮半島との関係では、①日韓間の貿易不均衡問題、②慰安婦問題、③北朝鮮の核開発問題（米国の衛星写真で核開発が明らかとなる）、④北朝鮮との国交正常化交渉、⑤北方領土での韓国の活動、という5つの大きな問題を抱えていました。私は、何かの問題が解決すれば、全体的に光明が見えてくると考え、貿易問題に全力を注ぎました。そして、この問題が決着すると、日韓関係は冷静に他の問題でも協議できる雰囲気になりました。

7. 金大中（キム・デジュン）大統領の訪日

私は、それに直接関与いたしませんでしたが、日韓関係で重要な出来事として、1998年の金大中（キム・デジュン）大統領の日本国賓訪問があります。この機会に、金大中大統領は小淵総理と首脳会談を行い、その結果を「パートナーシップ宣言」として発表しました。また、日本の国会で演説もしました。これを機会に韓国は、日本の文化の受け入れを始めました。このときの基本合意は、日本は村山談話での「アジア諸国に与えた苦痛」という表現を「日本が韓国に与えた苦痛」と国名をいれ文書化、具体化したことでした。これに対し韓国側は、日本が戦後、平和民主主義国家として生まれ変わったことを認めました。現在、韓国の政治やマスコミは、これと逆のイメージをしきりに発信しています。しかし、今の日本人で戦前と同じ思いを持っている人はいないと思います。事実を事実として認め合うことが相互理解の出発点です。また、韓国の日本文化開放によって、お互いに文化を刺激し合い相互に発展しています。日韓の文化は似ている側面と違う側面があるため、お互いに学びあう側面と親しみあう側面が他の文化の間よりも強いのだと思います。

8. 盧武鉉（ノ・ムヒョン）大統領時代

私の4回目の韓国勤務は2005年からの2年間でした。盧武鉉（ノ・ムヒョン）大統領は韓国史を含め、歴史の見直しを重視していました。このため、日韓関係にも歴史問題が影を落としました。竹島問題を領土問題から歴史問題にすり替え、日韓間のシャトル外交を中断し、植民地時代の日本への協力者の財産を没収し、日本の調査船の臨検を行うと本気で脅しました。竹島問題を巡って日韓の緊張関係が一層高まったのはこの時です。ただ、政治問題を離れば、日本では韓国の映画、ドラマ、ポップスが大流行し、韓流と呼ばれるようになりました。韓国でも、政治関係をよそに日本人に対して非常に好意的になりました。

9. 大使としての赴任

私は、2010年8月に大使として赴任しました。その月はちょうど日本の韓国併合100年に当たる月でした。正直、私は前任者がこの月までやってくれれば、と考えたりもしました。しかし、考えて見ると、私は併合100年の最後の大使であり、新しい100年の最初の大使です。新しい100年を作っていくのが私の使命だと考えたとき、非常に士気が上がりました。併合100年を乗り越えるにあたり、菅総理（当時）が談話を発出し、これを受けて李明博（イ・ミョンバク）大統領の演説は、「乗り越えるべき課題はまだ残っているが、ともに新たな未来を開拓する」ことを呼びかける内容となりました。こうして、私の大使としての船出は順調に思われました。そして、同年（2010年）9月に入ると外交通商部の柳明桓（ユ・ミョンファン）長官がソウルの日本商工会の代表を公邸に招き、現地のビジネス環境について意見交換してくれました。

10. 東日本大震災

2011年に東日本大震災が発生した際には、韓国の国民の間では、自国で発生した如何なる自然災害にも増して支援の輪が広がりました。全てのテレビ局、主要新聞が市民に募金活動と呼びかけ、明洞（ミョンドン）などの繁華街では日本を激励する横断幕が垂れ下がりました。私も、マスコミの日本支援活動には全て参加し、韓国の国民に感謝の気持ちを伝えました。また、韓国政府は世界に先駆けて救助犬を派遣し、その後、消防団も派遣してくれました。大使館と広報文化院に設置した記帳には李明博大統領はじめ各界の要人、市民が弔意と激励を伝えてくれました。大統領はまた、日中韓首脳会談の際には被災地支援のため何でもするといわれ、宮城県、福島県を訪問し、福島産農産物を試食してくださいました。私は、韓国国民の心の温かさをこの時ほど感じたことはありません。李明博大統領は竹島上陸をしたことで日本では批判する人の方が多いと思いますが、実はこの時までの日韓関係に最も尽力した大統領の一人ではないかと思いません。

11. 竹島問題

竹島の問題に関しては、日韓間で認識に大きな隔たりがあります。日本では領土問題と考えていて、韓国が竹島に関する領有権を強化している、このため、日本もよりしっかりと主張せざるを得ない、との立場です。しかし、韓国では歴史問題（注）と考えているために、日本が少しでも主張を強めると挑発だと映るのです。これも盧武鉉（ノムヒョン）時代に問題が歴史認識に摩り替えられてしまったためです。

（注）竹島の歴史問題：1905年（明治38年）の第二次日韓協約で日本が韓国を保護領としたその年に日本政府が閣議決定で竹島を島根県に編入したので、韓国ではもともと韓国領土であった竹島が侵略により日本領土とされてしまった、と歴史認識されている。

李明博大統領が、竹島に上陸したことは日本として受け入れることが出来ませんが、竹島については特別な思いがあったようです。洞爺湖サミットに出席のため、大統領としてはじめて訪日したとき、教科書改訂での竹島に関する記述について、日本の総理からより詳しく取り上げることになることを伝えられ、韓国国内で厳しい批判を受けました。それ以来、竹島問題に関しては、この問題で失敗したので、このままでは終われない、との思いがあったのかもしれませんが、それ以外にもさまざまな要因があると思いま

すが、竹島が歴史問題とされてしまったために、韓国の大統領は誰であれ、毅然と対応しなければならないと考えるでしょう。この問題を沈静化させるためには、これを今一度領土問題に戻していく必要があります。そのためには、冷静かつ丁寧に日本の主張の根拠を示していくことが重要と考えます。

12. 慰安婦問題、歴史認識問題

韓国の人々はハートで考えるところがあります。慰安婦問題に関する日本の主張がどうであれ、「元慰安婦の人々は人生を台無しにされ、これに対し20年余り、大使館の前で雪の日も雨の日も灼熱の日も、日本政府に謝罪と補償を求め続けてきた。可哀想ではないか」という気持ちです。日本は女性基金でこうした問題に対応してきたわけですが、心が通じなかったということです。2011年の8月に憲法裁判所の判決が出て以来、韓国挺身隊問題対策協議会（日本の慰安婦問題解決のために結成された韓国の団体）は運動を強化しています。

また、米国等の民主主義国家では、「現在戦乱が起きているところでは女性の人権が蹂躪されおり、慰安婦問題も女性の人権に対する大きな侵害である」と批判を強めています。日本の立場の主張は言い訳としか受け止められませんでした。この問題に対処するにあたっては、これまでの日本の対応で示してきた誠意を理解してもらうことから始めるのが賢明だと思います。

最近韓国で、日本の政治指導者の歴史認識が問題となっております。これも、竹島問題や慰安婦問題での日本の対応が歴史認識に欠ける、と受け止められていることと関連したものではないかと考えます。米国は、日本が歴史認識の問題で後退しているのではないかと、これによって日韓関係がギクシャクすることは日米韓の連携に水を差すのではないかと心配しています。また、その隙に中国の海洋権益への侵害がさらに強化されることも懸念されます。日本は戦後67年が経ち、時代に即応した安全保障体制を検討していくにあっても、日本が歴史認識問題で信頼を失うことは避けるべきと考えます。

13. 経済関係

韓国と日本の経済的関係は飛躍的に高まっています。日本の商社や銀行などは、韓国の企業を日本の企業と区別せず、取引を行っています。日韓間の貿易、投資関係は緊密化しており、特に第3国におけるインフラ事業への共同参画や資源の共同開発、取引での連携は極めて活発になっています。それは政治関係がギクシャクしてもほとんど影響がないといわれています。日韓のEPA（Economic Partnership Agreement <経済連携協定>）交渉は、政治問題の余波があり、私の大使時代に交渉再開とはなりませんでしたが、日韓EPAは単に両国間の貿易を自由化するためではなく、世界の中で協力していくための基盤づくりであるとの共通認識が得られつつあったと考えます。最近、アベノミクスによる、円安・ウォン高が韓国経済に及ぼす影響が懸念されています。しかし、日韓経済関係は両国の強味、弱味が補完関係にあり、今後とも協力関係は深まっていくと考えます。

14. 国境の感じられない関係

日韓間の人的往来は500万時代といわれ、これがさらに増加していくものと考えます。日韓の政治的関係が悪い今でも、韓国からの観光客は円安の影響もあり、今年（2013

年)に入り 30%ほど伸びています。私は韓国で顔が良く知られていますが、一人で明洞(ミョンドン)などを歩いていて声をかけられても、嫌な思いをしたことはありません。日韓間には格安航空会社の定期便が多く運行するようになり、日韓は日帰り圏になりつつあります。文化交流を通じ国民間の親しみは高まっています。

15. 結び

日韓間では、政治問題を巡って国民感情の対立があります。また、現在両国の政界ではこの対立を和らげようとする雰囲気も感じられません。しかし、日韓関係が悪くなる時も速ければ、良くなる時も速いという特徴があります。また、政治問題、歴史問題を除けば国民感情の対立は感じられません。ドイツとフランス、ポーランドなどが歴史問題で歩み寄ったのは、国民感情を横に置き、事実関係を確かめ合おうとの合意が出来たからです。日韓の首脳間でこうした合意を形成できれば、日韓関係は改善に向かうでしょう。

私は日韓関係について、一喜一憂せず中長期的な視点、流れで捉えるようにしています。そうした視点で見ると、日韓関係で解決の糸口が見出せるのではないかと考えます。

以 上





執筆者紹介

武藤 正敏(むとう まさとし) 1948年 東京都生まれ
前駐韓国大使

<学歴・職歴>

1972年 横浜国立大学経済学部卒業
1972年 外務省入省、朝鮮語研修
1991年 外務省アジア局北東アジア課長
1993年 在大韓民国日本国大使館参事官
1996年 在連合王国日本大使館公使
1999年 外務省大臣官房審議官
2007年 特命全権大使 クウェート国駐箚(ちゅうさつ)
2010年 特命全権大使 大韓民国駐箚(ちゅうさつ)
～2012年